

# ニホンジカの里山への分布拡大 東京都秋川丘陵（小峰峠）での記録

（公財）科学教育研究会研究員

森 弘 安

都立秋川丘陵自然公園の尾根道に、自動カメラを2年間設置して通過する野生哺乳類を撮影した。表1に示した10種類の野生哺乳類を撮影したが、2年目にニホンジカの撮影数が急増し、他の地域からの移動による分布の拡大が進んでいると考えられた。

東京都環境局の資料<sup>〔文献1〕</sup>では、この地域を「分布拡大防止エリア」に位置付け、ニホンジカ（以下「シカ」と記載）の目撃はあるが、農林業被害のない状態を維持し、生息域の拡大抑止を目指すエリアとしている。

秋川丘陵では大きな植生被害は生じていないが、すでにシカが生息しており（写真1）、個体数の急増、植生被害の急増への対策の遅れが懸念される。

写真1 ♂1頭、♀4頭の群れが里山へ  
秋川丘陵Bカメラ、2016.02.25, 00:26撮影



## 1、ニホンジカの分布拡大がどうして問題か

林野庁の資料<sup>〔文献2〕</sup>では、シカが各地の森林で個体数を増加させ、分布を拡大し、林業被害ばかりでなく自然植生に強い影響を及ぼしていることを示し、その被害対策を提起している。

シカは、メスが年に1頭の子を産むが、普通は2年目のメス個体から繁殖が始まる。捕食者がいない現在、食物になる植物が十分あれば、4～5年でほぼ2倍に増えて高密度化しやすい。

林野庁の資料から、高密度化による自然環境への影響についての記述を簡略化して次に引用した。

### （1）森林の下層植生の被食による消失

- ① 気付かぬうちに植生種数と被度が減少
- ② シカが好まない植物だけが残る
- ③ 下層植物を食べ尽くし、落葉まで食べる

### （2）雨水による土壌の消失

- ① 雨水の表面流が増加
- ② 森林の貯水力が低下
- ③ 林床の裸地化が進み、斜面崩壊の可能性

### （3）森林での樹皮剥ぎ

- ① ツリバナやリョウブなど好みの低木の樹皮を剥いで食べる
- ② モミなどの針葉樹の高木の樹皮を剥ぎ、形成層部分を食べる
- ③ 環状除皮で養分通路が遮断され、樹木の立ち枯れが続出する

#### (4) 生物多様性の低下

- ① 森林構造の変化により、構成種の組成が単純化する
- ② 下層植生の消失により、多くの動物が住み場所を失う（土壌生物、昆虫類、両生類、爬虫類、哺乳類、鳥類など）
- ③ 多くの動物の消失により、森林の生物多様性は急速に低下する。

奥多摩町の多摩川北岸地域では、シカの高密度化が森林生態系を変化させ、平成16年には3か所で土砂流失が発生した。東京都の資料<sup>(文献1)</sup>には被害規模が14haに及び、大規模な治山事業が必要になったことが記されている。

## 2、秋川丘陵のニホンジカを定点撮影する

2年間設置した自動カメラの撮影画像から読

み取れるニホンジカの状況について報告する。

撮影場所の都立秋川丘陵自然公園は、東京都八王子市とあきる野市の行政境にあり、秋川の右岸12kmにわたって細長く続く標高300m前後の丘陵地帯である。都心方向の東端は都立滝山自然公園に、関東山地方向の西端は秩父多摩甲斐国立公園に接している。現在、秋川丘陵自然公園内には都立小峰公園、ゴルフ場、遊園地、住宅団地、大型墓地、高齢者施設などがあるが、多くはスギ・ヒノキ植林と夏緑樹林におおわれた丘陵である。

都立小峰公園に隣接する小峰峠の尾根道に、自動カメラを設置した。カメラ設置地点を図1に示した。

撮影に用いた自動カメラの機種は、BMC自動撮影カメラで、写真2のように樹幹に設置し、ほぼ1カ月毎に電池とメモリーカードを交換し

図1 秋川丘陵における自動カメラの設置場所



た。カメラAとBの撮影結果からシカの生息状況を報告する。

写真2 カメラA ヒノキ樹幹約2 m 高に設置



もにシカの撮影数が多く、さらにシカだけが2016年度に大きく増加したことが分かる。シカの生息分布の状況に変化が生じていることが推測される。

撮影数は、同じ個体がカメラの前を何回も行き来し重複して撮影された数であり、個体数を直接示したものではない。個体識別によって、生息個体の実数を確認し表2に示した。

表2 月毎のシカ撮影数及び生息個体数(性別)

月	2015年度		2016年度	
	撮影数	月毎の生息個体数と性別	撮影数	月毎の生息個体数と性別
4月	6	3 (♀3)	38	8 (♂4, ♀4)
5月	1	1 (♀1)	17	5 (♂3, ♀2)
6月	0	(撮影なし)	39	7 (♂3, ♀3, 幼個体1)
7月	2	3 (♂1, ♀1, 幼個体1)	46	6 (♂1, ♀4, 幼個体1)
8月	1	1 (♀1)	14	4 (♂1, ♀2, 幼個体1)
9月	14	4 (♂4)	10	3 (♂3)
10月	21	9 (♂9)	70	12 (♂11, ♀1)
11月	12	5 (♂4, ♀1)	15	5 (♂5)
12月	10	3 (♂3)	7	2 (♂2)
1月	0	(撮影なし)	10	4 (♂4)
2月	9	7 (♂3, ♀4)	4	3 (♂3)
3月	3	2 (♂2)	1	1 (♂1)

### 3、自動カメラに写った野生哺乳類

ニホンジカの撮影数を相対的に見るために、同じカメラで同じ期間に撮影された他の野生哺乳類の撮影数を表1に示した。

表1 自動カメラによる撮影数、A. Bカメラの合計

種名	2015年度	2016年度
ニホンジカ	79	271
タヌキ	290	243
イノシシ	119	86
キツネ	89	84
アナグマ	41	46
アライグマ	42	34
ノウサギ	14	9
テン	12	7
ハクビシン	4	2
ニホンザル	0	2
合計	695	784

表1から、タヌキ、イノシシ、キツネとど

### 4、季節によるシカ群の変化

表2は撮影数及び生息個体数と性別を月別に示した。表2の「生息個体数」は、月毎に撮影されたシカの画像を精査し、角の分枝の特徴や顔形などで個体識別をして、重複撮影されている画像を除いた個体数(生息個体の実数)である。しかし、体の向きによって個体の特徴を把

握できない画像は除いたので、実際の個体数はこれより多い可能性がある。

表2と写真3に示したように、6～8月に子ジカが撮影されている。少数ではあるが産育児が行われていて、この地域が繁殖地の一部になっていると思われる。

写真3 シカの親子 2016.07.06, 04:55 撮影



表2には示せなかったが、8月末から9月初旬までの時季と3月後半の時季にはシカの撮影はなく、他の土地へ移動したと考えられる。

2016年度の月毎の生息個体数と性別を、図2のグラフで示し、幼個体と性構成の季節変化を示した。

図2によると、春と夏の時季には♂♀と幼個体が撮影された。また、秋と冬の時季には写真4のような♂の成獣や写真5のような若い♂の個体が頻りに撮影された。秋は交尾期にも関わらず♀個体の撮影がほとんどないことも、この地域でのシカ分布の特徴と思われる。

### 3、秋川丘陵シカ群はどこから来たか

東京都環境局の資料<sup>(文献1)</sup>によると、東京のシカは、関東山地シカ個体群の一部で、古くから奥多摩の多摩川以北に生息していたが、聴き

図2 個体数と性構成の季節的变化  
(2016年度の記録、横軸は個体数を表す)

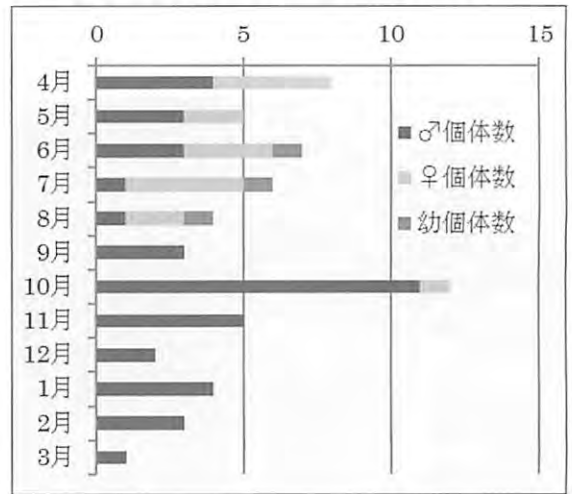


写真4 ♂の成体 2016.09.21, 19:07 撮影



写真5 ♂の1年子 2016.11.26, 19:52 撮影

